第 40 回　北海道建築賞・北海道建築奨励賞　審査経緯

本年度の北海道建築賞委員会は第 40 回というひとつの節目を迎え、主査および 4 名の委員を入れ替えた新たな体制となった。第 1 回委員会（5 月 7 日開催）では、新たな委員も加わったことから、表彰規程や審査日程など本委員会の全体を入念に確認した上で、応募作品に対する審査方法を審議した。また、この時点での応募作品に加えて、「北海道建築作品発表会作品集 2014」等の情報をもとに、今年度の審査対象になり得るような注目すべき作品について議論した。ここで挙がった作品の中から、委員会からの応募推薦対象作品として 5 作品を選定し、各設計者に応募についての検討を依頼することとした。

応募作品の出揃った第 2 回委員会（5 月 28 日開催）では、応募推薦対象作品の中から実際に応募された 3 作品を含む以下の計 16 作品を、今年度の審査対象とすることを確認した。なお従来通り、応募作品の中にそれに関わった委員がいる場合には、その委員は当該作品の審査に一切関与しないこととした。

応募作品および設計者（応募順）

①和琴フィールドハウス（川上雅彦君、宮越達也君/北電総合設計株式会社）

②おひとりさまの家（加藤幸恵君/（株）N.K 建築設計室）

③中の沢川の家（山田良君/札幌市立大学デザイン学部）

④スズキアリーナ新くしろ（柳沢明彦君/株式会社スミカ一級建築士事務所）

⑤北海道ガス札幌東ビル　技術開発・研修センター（水越英一郎君、海藤裕司君、藤本昌也君/株式会社山下設計）

⑥家族 7 人 30 坪の家（ヨシダオサム君/Atelier Monogoto 一級建築士事務所）

⑦家の手前、家の奥（小林光輝君/小林商会設計部）

⑧籤　HIGO（中山眞琴君、藤田麻由子君、山脇克彦君、小谷卓司君/（株）nA ナカヤマアーキテクツ、（株）ナカヤマアーキテクツ、元（株）北海道日建設計、（株）北海道日建設計）

⑨北海道薬科大学共用講義棟（A 棟）、北海道薬科大学研究棟（B 棟）、北海道科学大学保健医療学部棟（C 棟）（上甲孝君、鈴木彰信君、西尾吉貴君/大成建設株式会社一級建築士事務所）

⑩余市 OcciGabi ワイナリー（白鳥健二君、白鳥悦子君/有限会社アトリエ COSMOS）

⑪ゆいま～る厚沢部（瀬戸健似君、近藤創順君/株式会社プラスニューオフィス）

⑫呼人の家 -KIRAKUBO-（堀尾浩君、篠原航太君、長谷川大輔君/堀尾浩建築設計事務所、株式会社長谷川大輔構造計画）

⑬北見信用金庫紋別支店（菅原秀見君、大門浩之君、小林隆行君/株式会社北海道日建設計）

⑭恵庭市黄金ふれあいセンター（瀬戸口剛君、中原茂人君、小倉寛征君/北海道大学大学院工学研究院都市地域デザイン学研究室、株式会社渡辺建築設計、Sa design office 一級建築士事務所）

⑮TOKACHI HILLS（灘本幸子君/株式会社灘本幸子建築設計事務所）

⑯Terrazze（皆川拓君、新井秀成君/株式会社 AE5 partners）

これらの応募作品に対し、今年度の北海道建築賞においても継続して「先進性」「規範性」「洗練度」の３項目を基本的な評価軸とすることを確認した上で、第一次審査として応募書類による現地審査対象の選考を行った。各委員が個別評価を述べた後に、各作品について活発な議論が為され、現地審査対象作品として、③「中の沢川の家」、⑧「籤　HIGO」、⑫「呼人の家 -KIRAKUBO-」、⑮「TOKACHI HILLS」の４作品を選定した。応募作品数に対して現地審査対象作品数が、例年と比較して少ない結果となったが、次点となる数作品を現地審査対象とするかどうかについては入念に議論した上で、特に評価の高かった上記４作品に絞って現地審査を行うこととした。

現地審査は、7 名の委員全員出席のもと、6 月 28 日に③と⑧、8 月 22 日に⑫、8 月 23 日に⑮の日程で行われた。現地においては、それぞれ設計者本人からの説明に加えて、質疑を通じて各作品を詳細に把握することができた。さらに、周辺環境との関係性や空間の質感、あるいは竣工後の使われ方等々に至るまで、各作品の思考されている密度や設計の完成度などを確認することができた。

第３回の委員会（8 月 28 日開催）では、現地審査を行った４作品を対象として、最終選考を行った。選考方法を再度確認した上で、まず各委員が４作品それぞれについての評価を述べた。この時点で高い評価の得られなかった⑮「TOKACHI HILLS」は、賞の対象から外すこととした。全体として高い評価を得た③⑧⑫の３作品については、個別に活発な議論が為され、最終的に北海道建築賞に⑧「籤　HIGO」、北海道建築奨励賞に③「中の沢川の家」とすることを、委員全員の同意のもとで決定した。⑫「呼人の家 -KIRAKUBO-」も高い評価であったが、後に触れる事由により今回は賞の対象外とした。

「籤　HIGO」は、建築の構造材と家具というふたつの枠組みの狭間において、全体が構想された建築である。多くの書棚や什器に囲まれる建築設計事務所の一般的な空間特性を見越して、鉄骨の構造材と家具とを一体的に解いて建築化している。スチール無垢材の 60mm 角柱を基本としたその空間は、構成自体はオーソドックスなものであるものの、構造材/家具という従来のヒエラルキーに対して、確かに‘そのどちらでもあるような’独特

な質感をつくり出している。また、鉄骨の扱いのみならず、様々な素材や細部に至るまで、説得力のあるものになっている。意匠側の作者がこれまでに蓄積してきた空間の演出手法が、ここでは構造材あるいは構造的合理性を介在することによって、単なる表層的水準に留まらない建築の表現となり得た。その意味において、意匠設計者と構造設計者とが協同することで初めて可能となった質の高い作品であると認め、意匠および構造における統括責任者二名を北海道建築賞受賞とするものである。

「中の沢川の家」は、「籤　HIGO」とは対照的に、空間の完成度というよりは‘住まいながら状況に応じて作り込む’ことが目指された、住み手の生活に対する想像力が強く試されるような住宅である。横長のジャングルジムのように 1800mm グリッドに柱が露出した空間は、一見すると建築的な操作が乏しいようにも思われるが、特に２階の梁上部の‘余剰空間’は、住まい手でもある作者とその家族の想像力を自由に生み出す場となっているようである。事実、子供たちは既にそこを‘わが場所’としており、住宅という枠組みを超えた奔放なアクティビティに対応した魅力的な工作物が現れつつある。手探りのディテールやローコストの材料等に寄りながら、様式的な洗練に向かうのとは逆に、日々生活することのゆたかな価値に気づかせてくれるような優れた試みであるといえる。

現地審査を経て、残念ながらも対象外となった２作品についても以下の通り総評を述べる。

「呼人の家 -KIRAKUBO-」は、網走湖を望む白樺林に覆われた斜面という敷地条件をよく読み込みながら、それとの対応において、空間を繊細に叙情的に紡ぎ出そうとしている。敷地高低差に沿ってスキップした空間は、階段を上り下りすることによって、慎重に開けられた開口部を通じて、異なった外部を感じ取ることができる。柔らかく曲面を描く天井面は、光の繊細な濃淡を、部屋から部屋へと柔らかく送り届けている。スケールや素材の選定、あるいは開口部等も抑制されて、全体に渡ってよくコントロールされており、スキップフロア・屋根形状等による「空間構成」と、光や景色等による「空間の質感」とが、幸福に融合した作品であるといえる。作者のこれまでの作品にみられたような温熱環境的な原理は、ここでは創作における主調というよりは、「空間の表情」を創り出す上でのさりげない前提のようなものへと変化しているようにみえる。作者も恐らくはそのことに意識的であり、その新たな方向性の萌芽をここに見ることができる。一方で、土間を含む半外部空間については、空間相互の関係性や素材の扱い方に若干の疑問も呈されたことなどから、優れた佳品であることは間違いないが、最高賞の対象としては難しいという判断に至った。全体として高い評価を受けながらも、作者は既に本賞受賞経験者でもあることから、新たな方法論での今後の展開と完成を期待する意味においても、あえて今回は賞の対象から見送ることとした。

「TOKACHI HILLS」は、もともと温室であった建物を、植物園入口を兼ねた土産物販売・カフェとしてリノベーションしたものである。３つのプログラムに対応する空間と客動線のコントロールなど、ここでの空間的操作は基本的に全て床面（土＋植栽）だけで行われている。温室であったために、元々が地面であったことを逆手に取って、植栽の植わった「外部」に対して、必要なところを Pave するという考え方自体は興味深いものである。一方で、この基本的な考え方に対して、実際の使われ方や外構の取り扱いなどには齟齬が見受けられた。商品や什器類が増えていった時に、この空間がどのように対応していくのか、クライアントも含めてそのあたりの検討と理解が必要であったように思われる。

（文責：山田深）

第 40 回　北海道建築賞

中山 眞琴 君　山脇 克彦 君　「籤 HIGO」の設計

この建築は、良好な住宅街の中に建っている、オフィス、ギャラリーと店舗を組み合わせたコンプレックスである。ファサードは、意匠設計者の従来の風景を切り取るような孤高の雰囲気を醸し出す作風とは違い、特異な存在感を与えることなく、以前からそこに佇んでいたかのように建っている。

籤 HIGO という作品の名の通り、細いストラクチャーに包まれた建築である。最大の特徴は、構造材が 50 ㎜角、60 ㎜角などの鋼製無垢材で構成されている点である。それらは構造体でありながら、本棚、家具や仕上となり、構造と仕上の区別が無い。特に建物の４周を囲んでいる本棚は、地震力と風圧力を負担し、構造体と仕上、家具、建具が全くもって一体化している。この本棚は、設計者の仕事のプロセスやアウトプットとしての結果である膨大な書類と蔵書を建築化しようという試みであり、それが見事に結実している。

建築は大概、フレームとも言うべきストラクチャーが基本となり空間を構成していくが、この作品は、ストラクチャーと言いながら、その基本である柱と梁の実態を全く見せない建築になっている。と言うより、その構成されている部材が、籤のように細いが故に、その実態を全く感じさせない、概念的な捉え方の建築になっている。

更にこの空間は、意匠設計者と構造設計者の協働と試行錯誤の繰り返し、会話と議論、葛藤と協調など様々なドラマティックな展開が繰り広げられたであろうことは想像に尽きない。この空間は、両者の互いの命題と課題解決の「対話」が無かったら生み出されなかった。昨今のデジタル化された建築・設計行為は、「ディテール」にまで立ち返り、工場や職人の生産レベルにまで達する純粋な議論が無いままに建ってしまう事が多い。その状況下にあって、あえてそのプロセスに立ち返り、建築を作り出したことにこの作品の意義がある。本来、設計とは、その土地やユーザーの状況から、求められる様々な条件をクリアし、建築によって最良の問題解決方法を提示し、更なる発展的な付加価値を与えることである。その建築を構成するものが、細部に渡る「ディテール」であるということを再認識させる作品である。

その「ディテール」で目を見張るのが、鉄、木、ガラス、コンクリートという現代建築の必須部材の素材をそのまま活かしながら、再生品であるコルクブロックとの融合を図り、最小の部材で良質な空間を構成している点である。コルクブロックは内装材や外装材に、断熱材、吸音材にもなり、そして構造体への荷重負荷軽減の役割も担っている。この構造体から建築全体までが連綿と繋がる構成は、まさしく、意匠設計者と構造設計者の「対話」から生まれた建築であることを表している。

この空間をオフィス空間として捉えた時、昨今の知的生産性の向上は、ICT 社会の中にあってさえ、アナログ的な「対話」から生まれるという重要性を体現している。この空間の中には様々な形でスチール躯体と繋がった家具があり、ワーカー同士の距離を適度にコントロールしながら、視線の見え隠れによる空気感の伝わりさえも「対話」として捉えている。この「対話」と「ディテール」の追及により、意匠設計者、構造設計者が本来あるべき建築行為を行い、新たな空間を作り出したこの作品を高く評価したい。

（文責：海藤　裕司）

第 40 回　北海道建築奨励賞

山田　良　君　「中の沢川の家」の設計

札幌の南部、砥石山を源流とする中ノ沢川に沿った傾斜地に住宅街が広がっている。その中でも特に勾配がきつく、川面からせり上がった北斜面の上に木色のボックスが佇んでいた。

東西端でおよそ 2m の高低差がある敷地で、地盤形状を変えず、かつ既存樹木を残すよう配置された 3×8 間の木箱は無塗装の貫材で覆われ、サッシュや建具は全て既製品が使われている。こうした安価な材料で構成された気張らない外観は、下見板張りの単純な形態と相俟ってか、ローコストに徹した潔さと同時に力強い佇まいを獲得している。

建物内部全体に、柱が 1820 ミリ間隔でグリッド状に配置されており、一見強い形式性を感じる構成となっているが、通路的な土間空間を中心とするプライベートエリアが広がる 1 階は、薄壁の位置や自然光の量、機能配置が巧みにコントロールされ、柱の存在はほとんど意識されない程度に抑えられている。

翻って 2 階はトリプルガラスの水平窓から射し込む自然光で満たされた天井高４ｍを超える大きなワンルーム空間となっており、1 階から連続するグリッド状の柱に同じ径の梁が掛かることで、汎用サイズの木材による立体格子が実現されている。

菊竹清訓のスカイハウスで外部スラブ下に吊り下げられた子供のためのムーブネットは、ここでは「インナー・ツリーハウス」として内部の構造材に「引っ掛かって」いる。設計者は、将来にわたり住み手自らが屋内建屋（インナー・ツリーハウス）を追加、あるいは撤去し、ライフスタイルの変化に合わせ変わり続ける「完成しない建築」を夢見ているという。このシンプルな箱型の住宅内において、ツリーハウスが様々な位置に取り付けられ、そこを子供たちが上下し、梁の上を歩くとき、そこはまさしくツリーが並ぶ森のような場となるであろう（現地審査時には既にそうなりつつあった）。

冬の長い北海道において断熱された大空間を確保し、生活や興味の変化に合わせ間仕切や家具を自由に動かす提案はこれまでもされてきた。しかしこの住宅おける「インナー・ツリーハウス」は、立体格子の中でその形式に囚われず自由な位置、自由な高さ、自由なサイズで存在している。周辺との有機的関係性。それはまさに本来のツリーハウスの魅力であり、そうした楽しみ方を可能にしたこの住宅は、北海道のような積雪寒冷地における「屋内新陳代謝」の実験場になり得るだろう。

その可能性と今後の展開を担保するのは、住宅内部に森を取り込んだとも言える巧みな空間構成と、内外の条件をあるがままに受け入れ、最小の操作でささやかな気付きの場を生み出してきた美術家としての活動に通底する、設計者の静かな然し強い意志であろう。

（文責：赤坂真一郎）